

遠江・駿河・伊豆における古墳の終末

植 松 章 八

-
1. 後期の前方後円墳とその終末
 2. 群集墳の終末
-

論文要旨

遠江・駿河・伊豆、すなわち静岡県における古墳の終末を前方後円墳と群集墳の終末から検討してみた。

1 前期の前方後円墳とその終末

中期後半を含めて、遠江で35基、駿河で13基、伊豆で3基、計51基の前方後円墳を集めて分析した。規模では全長30メートルまでを小型、30メートルを越えるものを大型とすると、遠江では一貫的に小型化が進んでわずかに3基が大型に属するが、逆に駿河では大型の継続性が目立っていた。規模の変化は内部構造ともかかわるようで、遠江では畿内系造墓技術による横穴式木芯粘土室や横穴式石室の普及が大勢となり、駿河では明らかな立遅れがみられる。また、遠江では6世紀後半以降に形成される群集墳に前方後円墳が含まれる現象が一般的となる。こうした6世紀における前方後円墳の終末の具体相を、いくつかの古墳群の分析を通して検討してみると、とくに5世紀後半代における首長墓系譜古墳のあり方に大きく制約されるものであることが明らかとなった。前方後円墳は6世紀後半をもって終焉することが確認されたが、そこには強い社会的規制がみられる。

2 群集墳の終末

6世紀前半以降に成立する各地の後期群集墳を、遠江8古墳群、駿河7古墳群、伊豆3古墳群に分けて概観するとともに、8世紀中葉に迎える群集墳の終焉にかかわる古墳群14群を抽出して分析した。その結果、3タイプのあり方が明らかになったが、それは各地の地域性としても把握できるものであった。その終焉には2つの画期が認められた。第一の画期は7世紀中葉で、遠江に顕著であるが6世紀以来の造墓活動が一貫に中断される。第二の画期は8世紀中葉で、遠江・駿河・伊豆ともほぼ一貫に人々は古墳から分離される。ともに強大な社会的規制で、「大生部多」事件以来の政治変革がもたらした律令的秩序が家父長層に浸透する地方的姿といえよう。